

# 7.10 さばかれた南京大虐殺 ～加害と被害にせまる

- 7月10日（土）13：40 開場～14：00 開演
- 資料代：800円（学生500円）
- 場所：大淀コミュニティーセンター（下地図参照）  
（地下鉄・天神橋筋6丁目駅下車、徒歩12分）
- ドキュメンタリー映像（20分）  
『南京引き裂かれた記憶（加害と被害の証言部分）』

## ■ 講演とトーク

『中国国民政府の戦犯追及方針と南京裁判』  
（都留文科大学教授）

講師 **伊香俊哉**さん  
（いこう・としや）



## ◆伊香俊哉さん（都留文科大学教授）講演

### 「中国国民政府の戦犯追及方針と南京裁判」



（いこう としや）プロフィール：1960年、宮城県仙台市生まれ。日本近代史研究者。現在都留文科大学教授。

著書：『満州事変から日中全面戦争へ』（吉川弘文館、2007年）／『戦争はどう記憶されるのか 日中両国の共鳴と相剋』（柏書房、2014年）

1931年に開始された満州事変、さらに1937年に開始された日中戦争の下で、中国側には膨大な戦争被害が生じていった。捕虜・住民虐殺、無差別爆撃、性暴力、細菌戦、毒ガス戦、強制労働、物資略奪などはその代表的な行為であった。第二次世界大戦が拡大するなかで、ヨーロッパにおいてナチス・ドイツの侵略・占領を受けた国々から、その責任を追及する動きが表れ、中国もそれに同調し、日本の加害責任を追及する姿勢を取り始めた。

戦後になって、東京裁判と中国10箇所に設けられた軍事法廷で、中国国民政府はどのような姿勢で日本の戦争犯罪を追及しようとしたのか、その中で中国は何をどのように裁こうとしたのか。そしてその責任を追及することで何を達成しようとしたのか。中国国民政府の戦犯裁判政策の動向を踏まえつつ、南京事件裁判の実態に迫り、戦犯裁判の意義と限界について考える。



## ■ドキュメンタリー映像（20分） 『南京引き裂かれた記憶（加害と被害の証言部分）』



一九三七年十二月十三日  
中国の首都「南京」に日本軍  
がなだれ込んだ。  
その前にもその後にも惨い  
虐殺が続いた。人々はこれを  
「南京大虐殺」と呼んでいる。

### 『南京引き裂かれた記憶』 映像総監修、調査責任者：松岡環

一体南京で何が起きたのか？その事実は、長い間中国にいる被害者にとっても日本で戦後を過ごした加害側の兵士たちにとっても、心の奥底に閉ざされた記憶だった。記憶の扉を市民グループ日中平和研究会が10余年にわたり追いつけた。取材した日本兵士は250余名、中国人被害者は350余名に上る。

南京大虐殺から80年以上が過ぎ去った。私達は、毎年欠かさず被害者を見舞ってきた。

家族を目の前で殺害され、自身が性暴力にあった女性は今もいう。「惨い目に合った。今も日本人を恨んでいる。」そして日本兵は「わしらは見てきたんや。だれも言えんが、事実南京では酷いことがあった。」加害と被害の記憶はまだまだ引き裂かれたままだ。



## 「南京の記憶をつなぐ2021」の賛同団体、賛同人になってください！

### ■賛同団体：

大阪城狛犬会、南京の映画をみる会しが、日中平和研究会、日本中国友好協会大阪府連合会、「週刊金曜日」読者の会・大阪、グループZAZA、銘心会南京、大阪教育合同労働組合

■賛同人：岡田光司、古賀滋、千葉征慶、中沢浩二、古橋雅夫、森田徹（2021年5月1日現在）

主催 南京の記憶をつなぐ2021 TEL090-8125-1757